

小中連携に向けた取り組み

：小中合同英語発表会の実践とその教育効果

村 岡 有 香

Joint Project of Elementary and Junior High school: Implementation of Collaborative English Presentations and Educational Effects

Yuka Muraoka

Abstract

On the first of December, 2012, Nishi-Atago Elementary School and Higashi-Atago Junior High School, in Tama city, jointly implemented English presentations in the curriculum. This study describes the content of the presentations and a detailed schedule for training students. Data obtained from the students, who observed and participated in the presentations, and teachers, who coached the students were analyzed to examine both the positive and negative aspects of the joint project. In addition, possible ways to implement such English learning activities are discussed.

Keywords : English Education in Elementary School, Joint Project of Elementary and Junior High School

キーワード：小学校英語，小中連携

1. 外国語教育における小中連携の意義

2011年度より小学校5・6年生において外国語活動が必修化され，外国語教育の入門期が中学校から小学校に移行されることになった。この改革により，これまで中学校教員が担ってきた役割の一部が，小学校教員に委託されることとなり，中学校3年間をかけて指導してきた内容が，小学校5・6年生を含む5年間を通して継続して学習することが可能になった。外国語活動

の目標は「コミュニケーション能力の育成」であり、小学校では「コミュニケーション能力の素地」を体験的に英語に慣れ親しみながら養い、また中学校では「コミュニケーション能力の基礎」を4技能の獲得と共に涵養する。しかし、学習内容や指導方法について、小学校と中学校では大きな違いがある。まず、小学校では、文部科学省から出された「英語ノート」(2011年度まで使用)や「Hi, friends!」(2012年度から使用)などがあるが、教科書ではなく、あくまでもガイドラインとして使われているため、小学校によって学習する内容は様々である。中学校では検定教科書を使い、取り扱われる言語材料も学習指導要領の中で明記されている。また、教科書がないことにも関連するが、小学校外国語活動は教科ではないので、数値的評価の対象にはならない。指導者については、小学校では基本的には学級担任が指導するが、中学校では教科担当者、いわば英語を専門とする教員が担当する。このような小学校と中学校における学習内容や指導方法に違いがあるにしろ、外国語教育が小学校から始まったことにより、その違いを理解し、乗り越え、断続的に統一した目標を持って指導を行う必要がある。松川(2007)が述べるように「小学校での英語教育がそれだけで完結するものではなく、中学校英語教育への一定のレディネスを形成するものであるという認識(p.24)」を小中の教員が共通して持つ必要があるだろう。そのような視点からも英語教育における小中の連携は今後大いに期待される取り組みであろう。

実際に、外国語教育における小中の連携はどのくらい実施されているのだろうか?これまで研究開発学校に指定された小学校・中学校において、様々な小中一貫の英語教育カリキュラムが研究課題として開発されてきた(松川・天下 2007)。文部科学省が実施した「平成21年度公立小・中における教育課程の編成・実施現状調査」によると、何らかの小中連携を実施している中学校は、9,930校中4,587校(約46%)あり、「情報交換」、「交流」、「小中連携したカリキュラムの作成」の3項目の中で、一番多い取り組みが「交流」(3,266校)、次いで「情報交換」(3,726校)である。「カリキュラムの作成」(614校)が一番少なかった。ここで紹介する小中連携プロジェクトは「交流」の部類に入る。「交流」には様々なレベルが挙げられるだろう。まず、小学校・中学校という学校レベルの交流、小学校教員と中学校英語担当者という教員間の交流、そして小学校児童と中学生の交流である。その中でも特に重要なのは、中学生が小学生に対して英語劇や紙芝居を見せるなどの

活動を通して行われる小学生・中学生との交流であろう（直山 2011）。このような交流は時間と労力が相当にかかるが、それにも関わらず望まれるのは、中学生の英語学習の動機づけや、小学生の中学英語へのあこがれや不安の軽減など、外国語教育における効果が高いからだと言える。また小学生と中学生との交流を通して、小学校教員と中学校英語担当者との交流も自然に生まれ、学習内容に関する情報の共有を進めることもできるという点でも意義があるだろう。

ここで紹介する小中英語合同発表プロジェクトは、このように今後高まりつつある英語教育における小中連携の強化を意識して行われた。現在までに多くの取り組みが行われており、その実践内容も報告されている（松川・大下 2007）。しかし、その数はまだ十分とは言えない。特に、英語活動に参加した児童や中学生の感想、また指導した教員の意見を詳細に分析した研究は数少ない。拙稿では、プロジェクトを参観、また参加した子供達の感想、教員とのインタビューから得たデータを基に、英語教育における小中連携がもたらした教育効果を考察する。

2. 小中合同英語発表会の概要

本プロジェクトは、多摩市西愛宕小学校・多摩市東愛宕中学校・恵泉女学園大学が多摩市教育委員会の支援を受けながら行った。恵泉女学園大学の「恵泉英語教育研究会（Keisen English Education Society = KEES）」は、主に教職課程を履修する約20名の学生から構成されており、2007年度より多摩市や稲城市など大学近隣の小学校において「ストーリーを生かした外国語活動」を展開してきた。西愛宕小学校には2010年度より約1か月に1回のペースで訪問し、学級担任の指導を仰ぎながら、5・6年生の外国語活動のクラスにて絵本を活用した英語の授業を実践してきた。絵本をテーマにした英語発表会も2010年度から毎年継続して行っている。東愛宕中学校は、西愛宕小学校に隣接しており、毎年多くの西愛宕小学校の卒業生が東愛宕中学校に進学する。

小中合同英語発表会の参加者は、西愛宕小学校6年生児童17名、5年生児童25名、東愛宕中学生6名の計48名の児童・生徒である。6年生児童は去年も同じような英語発表会を経験しているが、5年生は初めてである。東愛宕中学校からの6名の生徒（中学3年生）は有志で参加した。小学生児童・中

学生への指導は、恵泉女学園大学 KEES メンバー 7 名が学級担任と英語担当教員の指導を仰ぎながら行った。発表会は2012年12月1日（土）に行われ、1 時間目は 6 学年が 2・3 年生の下級生に対し、2 時間目は 5 年生が 1・4 年生の下級生に対し、英語の歌や劇などを発表するという内容だ。中学生有志者は両時間の発表に参加した。詳細なプログラムは以下の通り。

小中英語合同発表会プログラム

1. Hello Song (2分)
2. 劇「The Three Billy Goats Gruff」(12～13分)
3. 歌「Billy Goats Gruff」(3～4分)
4. ゲーム (10分)
5. 絵本「From Head to Toe」(電子黒板使用)(中学生)(7～8分)
6. Good-bye Song (2分)
7. (教室に戻って) 振り返りシートに記入 (5分)

3. 練習スケジュール

小中合同英語発表会本番に向けて、以下の練習スケジュールに沿って準備を進めた。西愛宕小学校での練習指導は KEES メンバー、学級担任、音楽・図工担当教員がそれぞれの小グループに分かれて行った。下記の練習時間以外に、西愛宕小学校では、朝練習、個人練習、休み時間の練習、また下級生を含めた学校全体リハーサルが行われた。東愛宕小学校では、個人練習の他、昼休みの時間を使って、英語担当教員の指導の元、練習を重ねた。

西愛宕小学校 5・6年生

11月14日 (水)	・ KEES メンバーによる発表内容のデモンストレーション ・ 児童の担当箇所の確認
11月21日 (水)	・ 各担当グループに分かれて練習① (5年生・6年生 50分)
11月26日 (月)	・ 各担当グループに分かれて練習② (5年生 50分)
11月27日 (火)	・ 各担当グループに分かれて練習③ (6年生 50分)
11月28日 (水)	・ 各担当グループに分かれて練習④⑤ (5年生・6年生 50分、5年生 50分)
11月29日 (木)	・ 各担当グループに分かれて練習⑥ (6年生 50分)

12月1日（土）	小中合同英語発表会本番
----------	-------------

東愛宕中学校 有志グループ

10月3日（水）	・絵本読み聞かせ練習①
11月9日（金）	・絵本読み聞かせ練習②
11月28日（水）	・絵本読み聞かせ練習・小学校でのリハーサル③
12月1日（土）	小中合同英語発表会本番

4. 分析のポイント

外国語教育における小中連携の意義や教育効果、また実施の際の様々な問題点を考察するために、以下の項目について分析を試みた。

- (1) 小中合同英語発表プロジェクトに参加した小学生児童や中学生はどのような感想・体験を得たか？
- (2) 小中合同英語発表を参観した小学生児童はどのような感想・体験を得たか？
- (3) 小中合同英語発表プロジェクトの指導・指揮を通して、小学校・中学校教員はどのような感想を得たか？

5. データー

本研究で使用したデーターの種類は以下の3つである。

- (1) 小中合同英語発表会終了後すぐに、参加児童と生徒（小学校5・6年生と中学生）が書いた振り返りシートのコメント。
- (2) 小中合同英語発表会終了後すぐに、参観した小学生（小学1・2・3・4年生）が書いた感想のコメント。
- (3) 小中合同英語発表会で指導に関わった小学校教諭（4名）・中学校教諭（1名）計5名のインタビュー。インタビューはプロジェクト終了約2か月後に個別に10分程度行った。

プロジェクトには、恵泉女学園大学のKEESのメンバーも参加したが、この研究では小中連携の教育効果の考察に焦点を当てるため、大学生の感想などは分析対象から外した。

6. 分析方法

参加した児童と中学生の感想、及び参観した小学校児童の感想は（1）好意的な意見、（2）否定的な意見、（3）中性的な意見の3種類に分けて、内容とコメントの頻度を分析した。英語に関する意見のみを抽出し分析することもできたが、コメントの多くは英語以外に関するものが多かったため、上記のような3つの視点から総合的に教育効果を分析した。小学校・中学校教諭5名のインタビューについては（1）どのような感想を持ったか、（2）今後の改善点についてそれぞれの意見を分類して分析した。インタビューでは、教員それぞれの立場での見解が示されたが、意見の特定化を避けるため、分析は包括的に行った。

7. 結果

7.1 参加した小学生と中学生のコメント

参加した小学校5年・6年生児童のコメントと中学生のコメントを分析した結果、どの学年においても好意的な意見が否定的・中性的な意見よりも多いことが分かった（表1参照）。また、ほとんどのケースで否定的な意見は肯定的な意見と一緒に使われていることが多く、否定的な意見のみを書いた子供は一人もいなかった（詳細なコメントの内容については付録参照）。さらに、1人当たりのコメント数の平均を比べると、5年生が一番高いことが分かった。ほとんどの児童・生徒が振り返りシートの中で1個以上のコメントを書いた。

表1. 振り返りシートコメントの分析結果（参加した小学生・中学生）

	5年生 (25名)	6年生 (17名)	中学生 (6名)	合計 (48名)
好意的な意見	69 (59%)	36 (71%)	18 (86%)	123 (65%)
否定的な意見	47 (40%)	14 (27%)	3 (14%)	64 (34%)
中性的な意見	1 (1%)	1 (2%)	0	2 (1%)
合計	117 (100%)	51 (100%)	21 (100%)	189 (100%)
1人当たり 平均コメント数	4.68	3.0	3.5	3.94

5年生のコメントシートの分析結果、好意的な意見が一番多かったが、否定的な意見も同時に多数見られた（表1・図1・付録参照）。しかし、否定

的意見のみを書いた児童は一人もなく、好意的な意見と否定的な意見の両方が見られた。5年生の好意的な意見は、(1)「よかった」(18コメント)、(2)「達成感(～できるようになった)」(17コメント)、(3)「楽しかった」(6コメント)、(4)「うれしかった」(5コメント)、(5)「がんばった」(5コメント)、(6)その他(「簡単だった」(3コメント)、「来年度の抱負」(4コメント)、「自信がついた」(3コメント)、「いい感じ」(2コメント)、「成功した」(2コメント)、「感心した」,「面白かった」,「後悔しない」,「いい機会だった」(それぞれ1コメント))の5種類に大別できる。「よかった」こととして挙げている例は、英語でのセリフがきちんと言えた、大きな声が出せたなど個人的に本番でうまくできたことに関する意見が多数見られた。「達成感」の内容としては、英語でのセリフや大きな声を出すことが最初はできなかったが、練習を通してできるようになったなど、個人々人内での変化を挙げたものが多かった。「楽しかった」具体例は、英語を使ったこと、劇に参加したことなどだ。「うれしかった」内容は、英語が話せたなど自分自身についてだけでなく、みんなが楽しんでくれてうれしかったなど、観客の反応や態度についてコメントも見られた。「がんばった」内容としては、歌、踊り、ジェスチャーをがんばって覚えたなどだ。

5学年の「否定的な意見」の内容で一番多かったのは、「苦労した」(24コメント)で、コメント数から判断すると、参加した5年生児童のほとんどが練習過程において、英語のセリフがなかなか覚えられない、朝練がきつかったなど何らかの労苦を感じる経験をしたことが分かった。次いで多かったのは、「本番にたくさんの人が来ていたから緊張した」(9コメント)、「本番にちゃんと英語でできるか不安・心配」(7コメント)、その他(「～ができなかったという自己反省」,「はずかしかった」(各3コメント)、「休み時間が練習でつぶれるのが嫌だった」(1コメント))であった。中性的な意見も1コメントあり、「がんばったことはない」という感想だった。

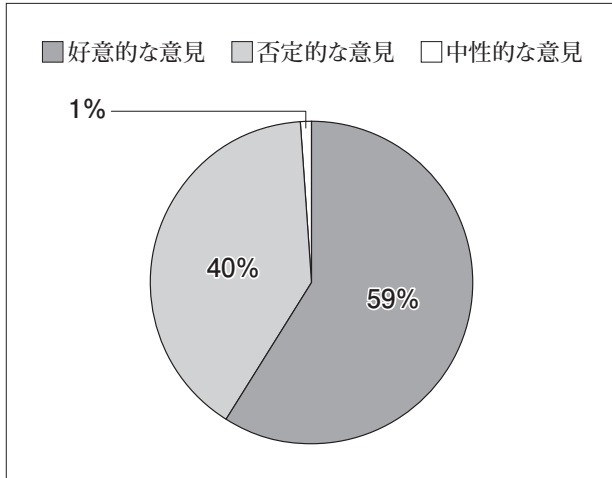


図1. 5年生のコメントシートの結果

6年生の分析結果も、5年生と類似した傾向が見られたが、5年生に比べて好意的な意見がより多く、否定意見がより少なかった(表1・図2・付録参照)。好意的な意見は、大別して(1)「楽しい」(10コメント)、(2)「よかった」(12コメント)、(3)「面白かった」(4コメント)、(4)「その他」(「貴重な経験」、「成功した」、「うれしい」、「やりやすかった」、「盛り上がった」、「覚えられた」、「またやりたい」、「楽しみ」など各1-3コメント)の4種類に分けることができる。「楽しい」という感情の対象は、自分が参加したことに対する感情と下級生と交流ができたことに関するものが多かった。「よかった」と感じた内容は、セリフを忘れなかった、本番で失敗しなかったなど自分のパフォーマンスに関することと、下級生やその他の観客が楽しんでくれたことに対する安堵の気持ちである。「面白い」と思った内容は、すべて中学生の劇に関することだった。

6年生の否定的な意見の半分は、「緊張した」(7コメント)という感情であるが、このコメントはたいてい「でも見ている人が楽しんでくれてよかった」などと肯定的なコメントと共に使われることが多かった。「その他」の内容として、「セリフが覚えられるか不安だった」(2コメント)、「セリフを覚えるのが大変だった」(2コメント)、「セリフを忘れて少し失敗した」(2コメント)、「人がいっぱいいて恥ずかしい」(1コメント)などがあった。

「中性的な意見」は1つあり、その内容は「特にない」であった。

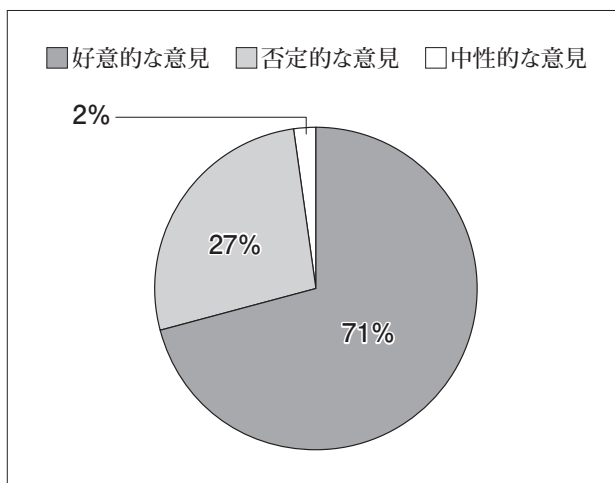


図2. 6年生のコメントシートの結果

英語合同発表会に参加した中学生6名のコメントシートを解析した結果、大部分が好意的な意見（86%）であることが分かった（表1・付録参照）。否定的な意見も14%（3コメント）見つかったが、そのすべてが、小学生のデータ分析の結果と同様、「今回の発表会は少し緊張したけど、楽しくできたので良かった」のように、好意的な意見と共に用いられた。好意的なコメントの内容で一番多かったのは、「よかった」（5コメント）と「将来に向けた意志」（5コメント）であった。「よかった」対象は、「思っていたより出来たので良かった」や「今回の発表会は少し緊張したけど楽しくできたので良かった」など、ほとんどが自分のパフォーマンスに対する自己評価だった。「将来に向けた意志」として「この経験を生かしてもっとがんばりたい」、「来年は後輩に引き継いでほしい」、「またいつかできたらやりたい」などの未来志向のコメントが挙げられた。その他、「良い経験になりました」、「小学生のみんなが喜んでくれたのでうれしかった」、「今回は最後で少し寂しいと思いました」、「練習した甲斐がありました」、「楽しく出来ました」、「小学生の劇の完成度にはびっくりしました」、「みんなが笑っているときが安心しました」（各1-2コメント）が分析できた。

7. 2. 参観した児童のコメント

参観した児童（1年生～4年生）の振り返りシートの中書かれたコメントの分析結果は、表2が示すように、全体的に好意的な意見（95%）が多く、またコメント平均数も学年によって徐々に増えていった。1・2学年においては、すべてのコメントが好意的意見だったが、3・4年生では、否定的な意見も少数見られた。否定的な意見の特徴は、英語発表会の内容そのものについてではなく、英語で歌が歌えなかった、ゲームで勝てなかったなど、自分自身に関することであった。「普通だった」などの中性的な意見は1つも抽出できなかった。

表2. 振り返りシートコメントの分析結果（参観した小学生）

	1年生(14名)	2年生(9名)	3年生(18名)	4年生(11名)	合計(52名)
好意的な意見	25 (100%)	20 (100%)	60 (98%)	35 (87%)	140 (95%)
否定的な意見	0	0	2 (2%)	5 (13%)	7 (5%)
中性的な意見	0	0	0	0	0
合計	5 (100%)	20 (100%)	61 (100%)	40 (100%)	146 (100%)
1人当たり 平均コメント数	1.78	2.22	3.33	3.64	2.8

1年生のコメントシートから分析できたコメント総数は25で、すべて好意的な意見だった。その内容は「楽しかった」（10コメント）、「おもしろかった」（13コメント）、「上手だった」（1コメント）、「素晴らしかった」（1コメント）であった。「楽しかった」例として挙げられたのは、ゲーム、歌、劇であったが、その中でも特にゲームが多かった。自ら一緒に参加してゲームで競い合い、歌を歌った経験を純粋に楽しいと感じたようだ。「おもしろかった」内容の多くは小学生の劇と、中学生による読み聞かせだった。

2年生のコメント総数は20で、1年生と同じようにすべて好意的な意見だったが、その内容に多様性が見られた。一番多かったコメントは「おもしろかった」（7コメント）で、6年生の劇や中学生による読み聞かせを参観しておもしろいと感じたようだ。次いで多かったのは「感心」を表すコメントで、6年生は劇の練習をよくがんばった、劇がすごく上手だった、英語で劇ができるなんてすごい、など6年生に対する敬意を表す言葉が多く使われていた。その他、「ゲームや歌などが楽しかった」（3コメント）、「6年生みた

いに立派になりたいという将来に対するビジョン」(2コメント), 「ゲームで仲間がたくさん見つけられてうれしかった」(1コメント), 「英語は得意ではないけど表現や動作で分かった」(1コメント), 「5年生のも見たかった」(1コメント)などの感想が挙げられた。

3年生のコメント数は1・2年生よりも多く60であった。内容はほとんどが好意的な意見である。否定的な意見も1コメントあったが、「やる前は難しいとおもったけど、やったらけっこう簡単でおもしろかった」のように好意的意見と共に使われていた。好意的な意見の中で一番多かったのが「おもしろかった」(26コメント)であり、その対象は6年生による劇や中学による絵本の読み聞かせだった。次に多かったのは「楽しかった」というコメントであり、ゲームや歌など自分たちも参加した活動を楽しかった経験と捉える意見が多かった。また、中学生と話したことを楽しかったとコメントした児童が一人いた。その他、「ゲームや歌を英語で歌えてうれしかった」(5コメント), 「またゲームをやりたい、英語発表会をやってほしい」などの希望に関する意見(5コメント), 「英語発表会を開いてくれてありがとうございます」と感謝の意を表す意見(4コメント), 「英語で全部話していてすごかった」など6年生に向けた尊意を表す意見(4コメント), 「英語が分かった」(1コメント)などに分類できた。

4年生の振り返りシートから分析できたコメント総数は40であった。そのうち35(87%)は好意的な意見であった。好意的な意見の内容として一番多かったのは「おもしろかった」(9コメント)で、その対象は、中学生による絵本の読み聞かせと5年生の劇についてであった。次に多かったのは「感心した」(8コメント)で、ほとんどが5年生に対する称賛で、5年生の劇やいろいろな役の人が英語をペラペラしゃべってすごかった、5年生が短期間であんなにできるのはさすがだと思った、などの意見が見られた。続いて多かったのは「びっくりした」(5コメント)で、中学生による絵本の読み聞かせで、バナナが本物だとは思えず、しかもその場で食べるなんて驚いた、5年生のみんなが英語がすらすら言えてびっくりしたなどの内容だった。次いで多かった「楽しかった」(4コメント)は、ゲーム、歌、英語発表会全体に対しての感想だった。その他、「皆が一生懸命演じたり、歌ったりしていて、来年はこんな風にやりたいと思った」など来年度に関するコメント(2コメント), 「ゲームでは会話をしながら楽しめたので、いろんな単

語を覚えられた」(1コメント),「司会がハキハキちゃんと言っていたから分かりやすかった」(1コメント),「少し英語に興味を持ちました」(1コメント),「歌はあまりよくできなかつたけど、踊れてよかった」(1コメント)などの少数意見も見られた。否定的なコメントは5つ(13%)抽出でき、「英語が難しくて、歌ではふりしかなかつた」(3コメント)や「ゲームの時に、あと少して1位になれたからとっても悔しかった」(2コメント)など、英語発表会の内容に関するよりも、「～ができなかつた」という自己反省や、ゲームに勝てなかつたという悔しい思いを表現したコメントであった。

7.3. 小学校・中学校教員のコメント

本節では、小学校・中学校教諭5名分の10分間のインタビュー・データに基づき、(1)どのような感想を持ったか、(2)今後の合同英語発表会の改善点についての分析結果を提示する。

一つ目の論点である「どのような感想を持ったか」に関して、(1)「合同英語発表会に参加した児童・生徒について」、(2)「大変だったこと」、(3)「中学生との合同発表会について」、(4)「参観した下級生について」、(5)「その他」の5つに分類して詳述する。

合同英語発表会に参加した児童・生徒に関する意見の多くは「発表の場があったのはいい機会だった」、「英語をただ覚え、話すのではなく、実際にコミュニケーション手段としてクラス以外の場で使ったという経験は大きい」、「大きな自信になっている」、「練習で苦勞した子供は、難しい英語をよく覚えられた、皆の前でよく声が出せたという満足感と、みんなの前で発表できたという達成感を感じることができた」など、英語での発表会は、児童・生徒にとって大変ではあったが、良い経験となり、自信につながったと捉えるものであった。また、合同英語発表会に参加したことによる大きな変化は特には見られないが、「片づけの時間に、子供達は英語の歌詞を口ずさんだりしていた」、「参加することで自信を付け、いろいろな場面で発表することに対して積極的になった」などの児童・生徒の変わり様を挙げた先生がいた。その他、「英語を覚え、理解し、表現するプロセスを経たうえで、更にみんなを楽しませてあげるといふ付加価値が付いてくるところが、子供達にとって一番のメリット」、「低学年の児童が5・6年生になったら、英語発表会を

あんな風にやるんだ、できるようになるのだという目で見て、実際に自分たちがやる立場になるというサイクルができて良かった」、「高学年の子供達はまずは英語に触れ、アウトプットを練習し、発表するという形があるので、目的のある、必然性のあるアウトプットの機会になっている」などの意見もあった。

大変だった内容に関して一番多く挙げられたのが、本番までの練習にかかった時間や指導などの負担感であった。この英語合同発表会の練習は、基本的には「外国語活動」の時間内で行ったが、「やらせるからにはしっかりとやってもらって、成功した感をもたせてあげたいとなると、どうしても授業以外でも指導しなければならなかった」という小学校教員のコメントにあるように、朝練習など授業以外の時間を使って練習せざる負えない状況があったようだ。この「大変だった」という意見は、上述したように児童達の振り返りシートで書かれていた「セリフを英語で覚えるのが大変だった」、「朝練が大変だった」などのコメントと一致する。負担感を増強した要因として、発表内容、特に劇の内容のレベルの高さがあったようだ。発表内容が難しく、練習なしでいきなりの本番だと、下級生が何をやっているのか理解できなく、啞然としたまま終わることが予想され、それを避けるために、合同発表会の前に全学年が学級内でのリハーサル、全体のリハーサルを重ねた。そのような学校全体での練習の成果があり、本番はスムーズに流れていったとの考えが示された。この指導や練習にかかった負担は、今後改善すべき事項だと言える。

中学生との合同発表会については、「小学生にとっても、中学生にとってもいい刺激になった」、「こういう交流の機会を通して、中学生の英語力というか、中学生になったら、英語がこんな風に話せるようになるのだという、いい目標が高学年の子供たちにできたのではないかと思う」、「参加した子供達は、表現する楽しさを経験したし、自分達よりも下の学年の子供達に伝える楽しさも学べた」、など概ね好意的に捉える意見が多数だった。今回行った英語合同発表会の大きな目的は英語教育における小中連携の強化であったが、交流方法について、「中学校は中学校で発表内容を用意して、本番ではゲストみたいな形でやっていただくのであれば大丈夫だと思います」、「中学校も協力してくれるのであれば、今後も中学校からも参加してもらえるといい」など、小中の交流は比較的スムーズに行えたことが分かった。しかし、

その反面「本当にタイアップして何かを一緒にやっっていこうとなると、その時間の確保は難しい」、「交流の仕方はあれが限界」など、時間的制約からくる交流の難しさを述べる意見も挙がった。その他の意見として、「今回のような形が本当に中学校との交流と言えるのか」、「うちの小学校を卒業した児童が、小学校のときに英語発表会を経験したから、中学校ではこのくらいできるようになった、それを見せたいという気持ちで戻ってきてくれたらすごい会になると思った」、「小学校の先生との交流はある程度はあるが、実際にお話しをしたり、一緒に何かに取り組んだりというのはないので、今後色々な意味で協力し合えるのかな、という印象を受けた」などがあつた。

参観した下級生に対する見解として、「本番は固まらずに楽しそうにできた」、「聞く側、見る側の下級生の子供達は、自分達にはないもの、自分達ができないことを上級生に教えてもらうことによって、あこがれなりを感じ、また英語に親しむことができる機会になった」などが挙がった。特に、前年度までの下級生が発表会の雰囲気にもまれ啞然としていた状況を踏まえ、今回は英語発表会を存分に楽しんでもらうために、「5年生の部も6年生の部もその前の時間に1時間りハーサルみたいに歌やゲームを一緒に練習した」とのことだ。発表する児童側だけでなく、参観する児童に対しても十分な教育的配慮が払われたことが、下級生のほとんどが「楽しかった」、「おもしろかった」など好意的な感想を持てた理由だと思われる。

その他、「発表があるということで、それに向けて子供達と一緒に高めあえた」、「大変さはもちろんあるけど、英語教育という目的だけでなく、クラスを作っていくとか、学級経営の1つとして、生きがいだと思った」、「西愛宕小学校の教育活動の内容を地域の方々に公開する、しかも英語教育という形で公開できるのは、学校の宣伝、アピールにつながると思う」、「下級生の子供達も来年自分達がやるんだなって楽しみにしている面もあるし、親もあると思うので、そういう期待や流れを大切にしたい」などのコメントもあつた。

2つ目の論点である、「今後の合同英語発表会の改善点」については、主に2つの見解が得られた。1つ目は合同発表会のプログラム内容に関することである。今回、5年生と6年生が同じ内容のプログラムを発表したが、それについて「5年と6年が同じ内容というのは厳しい」、「5年生と6年生は違うプログラム、特に5年生の劇は6年生よりも簡単なものが良い」、「なる

べく簡単にできる内容だと学級担任の負担も減る」などの意見が挙がった。特に、5年生のプログラムについては「10月くらいまでに習った語彙、キーワードセンテンスなどを使ってできるもの。または『おおきなかぶ』のように、単純な繰り返しのもの」など具体的な提案もなされた。また、今回の発表会では、劇の内容に合わせて、既存の英語の歌ではなく、替え歌を使用した。小学校の外国語活動のクラスで触れる英語の歌は、児童にとってその後もずっと記憶に残る歌になるので、替え歌ではないほうが良いとの考えもあった。またゲームや歌も、低学年が練習せずに本番ですぐにできるようなより簡単なものが良いとの意見もあった。

2つ目の改善点は「スケジュール」についてである。今回、英語発表会に向けた練習が始まったのが、西愛宕小学校では本番の約3週間前、東愛宕中学校では約2か月前からであった。この練習スケジュールがタイトであったことはほとんどの教員がコメントしており、それにプログラム内容の難度の高さも加わり、参加した子供達だけでなく、指導を担当した教員にとっても負担感が募った原因だと考えられる。今後の改善方法として、「もう少し事前に中身を把握した上で、企画の段階で提案したい」、「生徒たちが練習する時間を早めから確保して、あまり無理のないスケジュールでできたらと思う」などの提案も挙がった。

8. まとめ

英語教育における小中連携の強化を意識した、西愛宕小学校と東愛宕中学校が協力して行った今回の合同英語発表会が、どのような教育効果をもたらしたかを詳細に分析することがこの研究レポートの目的である。教育活動を計画し、ただ単に実行して終わるだけでなく、そこから子供達がどのような経験や感想を得たかを分析し、より良い教育活動にするために問題点・改善点を洗い出し、次につなげるといったビジネス業界では頻繁に用いられるPDCAサイクルモデルの活用は教育業界にも必要だろう。特に、現代のような多彩な文化的価値観が混在し、ダイナミックに変貌する多文化社会においては、これまで「良い」と信じられ行われてきた教育活動や教育理念を一度立ち止まってその真価を時代に合わせて再点検する必要は常にあるように思われる。

小中合同英語発表会は、参加した小学生児童や中学生、参観した下級生に

とって、どのような教育的意義があったのだろうか？上記に詳説した子供達のコメントを概観すると、全体的に好意的な意見がより多かった。否定的な意見はあったものの、そのほとんどは「最初は恥ずかしかったけど、恥ずかしさを捨ててやりきれた」や「歌で全然踊れなかったけれど、どんどんできるようになってうれしい」などのコメントのように、好意的な意見と共に使われていた。否定的な意見のみを書いた児童が一人もいなかったことも勘案すると、多くの担当教員が指摘したように、この小中合同英語発表会は子供達に「満足感」や「達成感」、そして「自信」をもたらした、教育的価値の高いプロジェクトであったと言えるだろう。中学生も合同で参加したことにより、小学生は中学生へのあこがれや親しみを持つことができたように思われる。しかし、その反面、これも担当した教員が指摘したように、英語発表会の内容の高さから生ずる負担が参加者全員にとって大きかったことも否めない。内容が簡単ではなかったからこそ、なおさら子供達の練習や完成度を中途半端にできず、子供達を「できない」から「できる」レベルまで根気強く指導しなければならない高い教育力が指導教員に問われた。児童や生徒の苦労と共に心を痛めながらも、粘り強く支える教員の優れた教育力と愛情があったからこそ、「満足感」や「達成感」を感じられるレベルまでひっぱり行け、また児童・生徒も苦労を乗り越える経験をすることができたと考えられる。子供達の努力だけでなく、それを支えた教員の指導力の高さも、好意的意見が多かった今回の発表会を支えるものであったように思われる。

今回のデータ分析の結果を思案すると、今後このような英語教育における小中連携を深めるための取り組みを行う際は、内容はよりシンプルに、あまり英語を覚えることや使うことに苦勞することなく、小学校児童や中学生が共に英語に触れることを楽しみ、自然に英語を使って互いの交流が促進されるような会にするとより良いだろう。今回は子供たちがそれぞれに与えられた役割を懸命にこなし、下級生を楽しませ、自分達も練習した成果を出すことが主な目的になってしまい、中学生との交流を通して中学校での英語学習への意識や関心を高めるといった目的は十分に叶えられたかどうかは疑問である。これは、子供達のコメントの中に、自分達の練習の成果を述べた意見は多いものの、「英語により興味を持った」、「中学校でもっと英語をがんばる」など、英語教育そのものに対する意見や中学校英語への関心を示す意見が、少数はあったものの、期待したほど多くはなかったことにも反映され

ている。もちろん、教員からのゆるぎない愛情とサポートに支えられながら、苦勞して練習し、本番で英語の長いセリフを間違えることなく大勢の前で大きな声で言えたという成功体験から得た精神的な成長や自信は、児童・生徒達にとってかけがえのない素晴らしい経験になり、将来の成長の助けになることは間違いない。今後もいろいろな教育レベルでの小中はもとより高大までも含む連携はもっと活発に行われるべきである。純粹に「英語教育」を中心にした小中交流の形態を考えると、子供達や教員に負担がないゆるやかな交流会の方が、自然に「英語」に注意が向き、英語を楽しむという経験ができるように思われる。具体的にどのような内容が適切か、また負担なく連携を推し進める方法などについては更なる実践と研究が必要だろう。

付録

5年生児童のコメント

好意的コメント

(1)「達成感（～できるようになった）」

- ・本番で思いっきりトロールという役をやりきれてとてもすっきりした。
- ・恥ずかしさを捨ててやりきれた。
- ・本番では、英語を覚えきり、ふりつけも覚えられました。
- ・だんだん練習していくうちに覚えてきました。
- ・悔いのないように恥ずかしさを捨ててできたと思います。
- ・朝練をしたらずかしさがなくなってきて、大きな声を出せるようになった。
- ・上手にできたと思います。
- ・本番前の緊張もとけてやりきれたと思います。
- ・自分の中では◎だと思います。
- ・「シンキングタイム」と言うところでいつも間違えてしまったけれど、今日は完璧だと思います。
- ・恵泉の先生達や森田先生に英語を教えてもらってできるようになった。
- ・「草」という役は周りからどう見られるか分からないけれど「草」としての役割は果たせたと思います。
- ・やりきったから心がすっきりした。
- ・今日はとってもすばらしい一日になりました。

- ・みんなの反応があったからか練習よりもやり切ることができました。
- ・劇もみんなやり切ることができたと思います。
- ・先生や恵泉の先生達が教えてくれたおかげで本番はすごく声が出ました。

(2) 「よかった」

- ・本番は誰一人セリフを忘れることもなかったのがよかった。
- ・風邪をひいていてあまり声が出ていなかったけど練習の時より本番は声が出てよかった。
- ・めっちゃめっちゃがんばってよかった。
- ・ぎりぎり個人練習で(セリフを)覚えられて良かった。
- ・英語で言えてよかった。
- ・踊りが踊れてよかった。
- ・たくさん練習して声も出るようになって、英語も言えてよかった。
- ・ゲームではみんな楽しんでくれて良かった。
- ・練習の時より声が大きく出せてよかった。
- ・本番でうまくできたのでとても良かったと思います。
- ・はずかしさを捨てられたのがよかったです。
- ・毎朝早く起きてがんばってよかったです。
- ・本番に成功してよかった。
- ・本番はやりきれてよかった。
- ・声が出ていていいと思いました。
- ・一番よかったことは英語での劇も楽しいなと思ったことでした。
- ・1年生、4年生、もちろん5年生のみんなも歌っているときやししゃべっているときも1年生を落ち着かせようとしていたのがよかった。
- ・今日大きい声でセリフを言えたり、かまずに言えてよかった。

(3) 「楽しかった」

- ・とても楽しかった。
- ・英語の発表はすごく楽しかった。
- ・本番の時にはもう英語ペラペラで英語がとても楽しくなりました。
- ・1年生と4年生の反応がよかったからかもしれないけど、劇をやっている

るこっちも楽しかった。

(4)「うれしかった」

- ・英語の発表会という劇に参加できてとてもうれしい。
- ・どんどんできるようになってうれしかった。
- ・練習している間に、徐々にしゃべるようになってきて、しゃべれたときはうれしかった。
- ・本番で思った以上にみんなが楽しんでくれてうれしかった。
- ・ちゃんと聞いてくれていてとてもうれしかったです。

(5)「がんばった」

- ・自分が出る番を間違えたり、踊りを間違えたりしたけど、覚えるのを頑張った。
- ・しっかり歌えなかったけど、踊りはがんばりました。
- ・森田先生や恵泉の先生が必死でやっている所を見てがんばらなくちゃと思いました。
- ・練習のとき声を大きくしないといけないから頑張って練習しました。
- ・ジェスチャーをがんばって覚えたり、考えた。

その他

- ・セリフを覚えるのは簡単だった。
- ・トロルの台本は意外に簡単でした。
- ・覚えるのも早かったです。
- ・少しずつ自信がもてた。
- ・本番はリハーサルよりももっと自信をもてた。
- ・だんだん練習していくうちに恥ずかしさがとれていったので自分に自信がつかしました。
- ・ジェスチャーも入れたからいい感じだった。
- ・これからははずかしさを捨てて、今日のを生かしていきたい。
- ・来年もやりたい。
- ・来年もあると思うのでがんばろうと思いました。
- ・本番で成功した理由は練習をいっぱいやり、いろいろなアドバイスをも

らったからだと思う。

- ・練習で精を出したおかげで本番が成功した。
- ・ドラマチームもあの長いセリフをよく覚えた后感心した。
- ・休み時間をつぶして練習するのはいやだったけど後悔することはなかった。
- ・たくさんの人の前で声を出すいい機会だと思いました。

否定的なコメント

「練習時の苦労」

- ・練習を何回もやって、朝などの練習でとてもねむかった。
- ・歌やセリフを大きな声で英語で話すのがものすごい苦労した。
- ・劇の練習の時、セリフを覚えるのがすごく大変でした。
- ・「レッツ プラクティス」が覚えられなくて苦労した。
- ・朝練がなかったから、その分大きな声を出さないといけないので苦労しました。
- ・歌で全然踊れなかった。
- ・英語で言葉を言うのが難しかった。
- ・練習はすごくきつかった。
- ・発音やジェスチャーなど先生や2人で考えたり苦労しました。
- ・草ダンサーズの最後のふりつけが手と足が一緒になって何回やってもうまくいなくて苦労しました。
- ・リハーサルするとき、ふりつけを忘れてしまって、全然できなかったので苦労しました。
- ・かなり踊りの練習はハードだった。
- ・苦労したことは朝早く起きることと、草ダンサーズの踊りです。
- ・私は練習にとっても苦労しました。
- ・私達ゲーム係はゆっくり話したり、ふりをつけたりするのが大変だった。
- ・なかなかまとまらなかったり、声が出なかったりで、それも大変だった。
- ・最初は全然声が出なくて、すごく困った。
- ・練習の時苦労したのは言葉を言う時の場所や歌の声の大きく出すという

こと、ジャスチャーを大きさにやることに苦労しました。

- ・練習で歌がとても大変でした。
- ・セリフ以上に歌がとても長くて苦労しました。
- ・あまり大きい声を出したことがなかったから大声を出すのが大変でした。
- ・英語も覚えるのが大変でした。
- ・苦労したことは英語を覚えることで、長いし、セリフが1つ増えたからもっと苦労しました。

6年生児童のコメント

好意的コメント

(1)「楽しい」

- ・（とても、すごく）楽しかった。
- ・2・3・6年生が盛り上げてくれたので楽しかった。
- ・2・3年生と交流ができて楽しかった。
- ・みんな反応してくれてだんだん楽しくなった。

(2)「よかった」

- ・セリフが忘れずに言えたり、振りも忘れずにできてよかった。
- ・間違えずにセリフを言えたのでとてもうれしかった。
- ・本番で失敗しないでできたからよかったです。
- ・せりふは忘れなかったのでとても良かったです。
- ・歌もちゃんと歌えてよかった。
- ・ゲームの時に2年生にちゃんと教えられてよかった。
- ・低学年の児童と一緒に踊ってくれたりしてよかった。
- ・見てくれている人たちが楽しんでくれたのでよかった。
- ・ゲームも劇も本も楽しく、最後まで笑顔でできて良かった。

(3)「面白かった」

- ・中学生の読み聞かせも自分たちが本の中に入ったみたいでとても面白かった。
- ・中学校の人たちの読み聞かせもとても（すごく）面白かった。

(4) 「その他」

- ・ 普段やらないことを経験できた。
- ・ 大成功だった。
- ・ 2・3年生がよく反応してくれてうれしかった。
- ・ 2・3年生がけっこう反応してくれたのでごくやりやすかった。
- ・ 2・3年生が反応してくれたのでとても演じやすかった。
- ・ 練習のときよりやりやすかった。
- ・ ゲームなどもみんなが楽しくやってくれたのでとても盛り上がりました。
- ・ 家で覚えて、学校でフリをつけたらすぐに覚えることができました。
- ・ また機会があったらやりたいです。
- ・ 中学でも英語の勉強をするのが楽しみです。
- ・ 中学生の読み聞かせを見て、私も中学生になったら、あんな風になりたいと思った。

否定的なコメント

- ・ 人がいっぱいすごい緊張した。
- ・ 本番は少し（ちょっと）緊張した。
- ・ セリフが英語だったので緊張した
- ・ 本番前は「せりふを忘れちゃったらどうしよう」ととても不安でした。
- ・ セリフが多かったので「覚えられるのか」と思っていた。
- ・ いつもの日本語ではないので覚えるのがとても大変でした。
- ・ 英語の言葉を覚えたり言ったりするのは大変だった。
- ・ 本番ちょっとだけふりを忘れてしまい、ちょっと失敗したと思いました。
- ・ セリフは最初緊張してど忘れしちゃった。
- ・ 人がいっぱいいて恥ずかしかった。

中学生のコメント

好意的コメント

- ・ 良い経験になりました。

- ・小学生のみんなが喜んでくれたのでうれしかったです。
- ・思っていたより出来たので良かったと思います。
- ・やってみて良かったと思います。
- ・楽しくできたので良かったと思います。
- ・英語でしゃべるのも良いと思います。
- ・子供達がいい反応をしてくれたから良かった。
- ・この経験を生かしてもっとがんばりたいと思います。
- ・来年は後輩に引き継いでほしいです。
- ・またやりたい。
- ・またいつかできたらやりたいです。
- ・今回で最後で少しさびしいと思いました。
- ・本番とても良く演技ができました。
- ・練習したかいがありました。
- ・楽しく出来ました。
- ・小学生の劇の完成度にはびっくりしました。
- ・みんなが笑っているときが安心しました。

否定的なコメント

- ・今回の発表会は少し緊張した。
- ・最初はできるかなと思っていました
- ・途中ははずかしくなることもありました。

参考文献

- 直山木綿子（2011）「外国語教育における小中連携」萬谷隆一・直山木綿子他編『小中連携 Q & A と実践』開隆堂
- 松川禮子（2007）「英語教育における小中連携を考える」松川禮子・大下邦幸編『小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携』高陵社書房
- 松川禮子・大下邦幸（編）（2007）「小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携』高陵社書房
- 文部科学省「平成21年度公立小・中における教育課程の編成・実施現状調査」